超人類

ガンジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超人類

【Ｎコード】
Ｎ４４４５Ｅ

【作者名】
ガンジー

【あらすじ】
中学生になっても相変わらずののび太。ジャイアンとスネオにはいじめられ、ドラえもんやしずかちゃんからは見放されていく。そんな時、のび太は一冊の本を拾う。それが世界の運命を変えることになるとは知らずに……

～天の章～（前書き）

この話はドラえもん系ですがだいぶアニメとのキャラ設定がはげしく違うのでイメージを崩したくない人は見ないでください。

～天の章～

のび太はこの春、晴れて中学生となった。
しかし、相変わらずの軟弱ぶりにドラえもんやしずかちゃんの心は離れてしまった。
そして、ジャイアンやスネオのいじめはますますエスカレートしていった。

いきなりだが、ここは空き地。
ドカッ、バキッ、「うわー！」ボコッ、ガンッ。　　ドサッ。
「ようのび太。これでだいぶスッキリできたぜ。またよろしくな、じゃあな。」
のび太が中学生になってから一ヶ月近くが経っていた。
今日ものび太はジャイアンに殴られていた。
ジャイアンは中学に入ってからますます傲慢になり、思うように事が進まないとすぐにのび太を殴っていた。
ストレスを発散するためだけに殴られるのび太。
しかし、のび太の不幸は留まることを知らなかった。

その二日後、源家で…、

”ピンポーン”「しずかちゃ～ん」
その日は日曜日だったのでのび太はこうして遊びにきたのだ。
しかし、いつもならすぐに出て来てくれるしずかちゃんなのだが、この日は、出る気配がない。
”ピンポーン”「おっかしいな～。しずかちゃ～…あれぇ？」
のび太が、ちらりと横を見渡すと見慣れた靴が勝手口の前に置いて

あった。
「あれはたしか…スネオの靴…。」そう、アレは確かにスネオの靴なのである。
「なぜスネオの靴があんな所にあるんだろう？　　…いや、そんなことより、
あそこにスネオの靴があるということはしずかちゃんも家の中にいるはず…
なのになぜ、出てきてくれないんだ！？」と、のび太は怒りながらも二階のしずかちゃんの部屋の様子を覗いてみることにした。（コレは犯罪だから読者のみんなはマネしないでネ。）
そして、のび太はそうっと中の様子を覗いてみた。すると、信じられない光景がのび太の目に飛び込んできた。

なんと、スネオがしずかちゃんと一緒にベッドで寝ていたのだ！！

のび太はショックで雷に打たれたかのように動けなかった。
そして、のび太は走り出していた。泣きながら、こう叫びながら、
「ドラえも～ん！」

家に着くとすぐ、のび太は自分の部屋にいるドラえもんにこれまでの事情を滝のような涙を流しながら話した。
だが、ドラえもんはなぜなのか急に怒り出した。
「どうして君はいつもいつも僕の道具を頼りにするんだ！たまには自分の力で何とかしろー！！！！」
こう怒鳴った後、ドラえもんはいきなりのび太を掴んで窓の外にブン投げた。
「うわあ～～～～…」のび太はまるでムサシとコジロウのように飛ばされてしまった。
こうして（？）のび太はみんなに見放されたと思い、とうとう家にも帰らなくなった。

突然だがある日の夜。ここは空き地。
「はぁ～…疲れた～…」
のび太はあの日以来いろいろな所を歩き回ってみたが、
やはり往く当てもなくこの空き地の土管の上で　ボ～　としていたのだった。
「きっとボクは一生いじめられ続けるんだ……あっ？」
そのとき、のび太は土管の中に一冊の本が置いてあるのに気がついた。
「なんだろう？」普段本を読まないのび太だが、その本には何か惹かれるものがあったのだ。
持ち上げてみると、本は思ったよりも重量があった。開くと本というよりも箱のようなもので
中には一枚の紙と緑色の液体が入った瓶が入っていた。
その紙には大きくこう書いてあった。　＜超人類薬の説明書＞
その説明書によると、”この薬を飲むと自分の中で最も強い感情が肉体を支配し、常人のレベルを遥かに超える力を手にすることができる。ただしこの薬を飲むときには
自分が今一番望んでいることを想いながら一気に飲み干すこと。”
　と記してあった。
普通の人ならこんなものを信じるはずもなかっただろう。
だが、精神的に追い詰められているのび太にとってたとえ冗談だったとしても
何かに頼ろうとする気持ちがあったのだろう、のび太の手はすでに瓶の蓋に手が掛かっていた。
のび太はためらう事なく瓶の蓋を開けた。そして、自分が今何を望んでいるのかを考えた。
（ボクが一番望んでいることは……復讐…）
（そう…復讐だ！今までボクのことを見下してきた奴ら、バカにしてきた奴ら、欺いてきた奴ら全員だ！

この薬を飲んで強くなったら今にみていろよ！）
そう心の中で叫んだ後、のび太はグイッと瓶の中身を飲み干した。
「……ん？」　特に何も起きる様子がない。身体もどこか変わったところは何もないようだ。
「ちぇっ、やっぱり誰かのイタズラだったのか…」　　と、そのとき

ドクン。「うん？」　　ドクン。「な…何だ？身体が熱い…意識が薄れ…ていく…」
ドクン、ドクン、ドクン。「うおおあああ！！！」
それはもはや人間の、のび太ではなかった。
激しい憎しみだけがパワーアップし、のび太を巨大化させてしまった。
しかも憎しみのパワーアップにともなって、のび太は自分の身体に力がみなぎってくるのを覚えた。
試しにのび太はその溢れるパワーを口から光線のように放射してみた。
すると、たちまちなぎ払いのようなビームに民家は破壊され、人々は焼き尽くされた。
のび太はその光景を見てゾクゾクする感覚を覚えた。
「（オレ自身の力でたくさんの人間が死んでいる、苦しんでいる。まるで…人がゴミのようだ……）」

「…くっくっくっ、はーはっはっはっはっはっ！そうだ！もっと苦しめ！
このオレが受け続けた苦しみや屈辱、百万倍にして貴様らにかえしてやるわ！くはははは！」

このとき近くの通りではジャイアンとスネオがこの光景をただ呆然と眺めていた。

「ど、どうしよう」と、ジャイアン。
「でもなんとかしないと」と、スネオ。
しかし今ののび太には近づくことすらできない事は二人にだってわかっていた。二人が思い悩んでいたとき、背後から「二人ともこんなところで何してんの？」と、ドラえもんがタケコプターで二人の近くに降りながら聞いてきた。
「あっ、ドラえもん。実はさ、のび太がああいう風になっちまったのも俺達のせいなんじゃないのかなって思ってさ。　なんとかしてやめさせたいんだけど近づけなくて困ってんだ。何か道具出してくれないか？」と、ジャイアンが頼むと
「よ～し、わかった。そういうことなら二人の手助けをしよう。でも、どうするんだい？」
「僕にいい考えがあるんだ。」と、自慢気にスネオが話を切り出した。
「まず、僕は、……で、ジャイアンは、……
……でどうかな、ドラえもん？」
「うん、いいよ。それじゃあ二人に（ごそごそ）その（ごそごそ）道具を貸そう。がんばってね。」こうして、それぞれの道具を手にした二人は行動に移ったのだった…

一方、のび太はいまだに破壊を続けていた。どうやらのび太の憎しみのパワーは相当に膨れ上がっていて自分でも上手くコントロールできていないようなのだ。そんな無茶な暴走を続けているのび太のすぐそばではジャイアンが　出撃体勢に入っていた。ジャイアンが右手に掴んだモノを口に放り込んだらジャイアンがみるみる大きくなっていき、のび太と同じぐらいまでに巨大化した。これに気づいたのび太は怒りを露にした。なにしろ、いままでずっと自分を　殴っていた男が目の前にいきなり現れたからだ。「のび太…また俺にぶん殴れたいのか！？」
「ジャイアン…、貴様ぁ～、よくもオレの前にのこのこと現れやが

って！！貴様だけは絶対に許さんぞ！！！」
のび太とジャイアンが一触即発になったとき、遠くから「お～い」と二人を呼ぶ声が聞こえてきた。「ムッ。誰だ！？」　のび太がイライラと怒鳴り返すと、遠くからやはり二人と同じくらい巨大化したガンダムが飛んできた。
「間に合った～。」と、コックピットから聞き慣れたあの声がした。
「スネオ～、貴様までもが！わざわざオレの前に現れやがって！！！」のび太はスネオとジャイアンという
憎しみの最大の発生原因である二人を前にして、もう手がつけられないほどの殺気を発していた。
「まずは俺からだ、のび太。スネオ、お前はそこでみていろ。」「オッケ～、ジャイアン。」

こうして、のび太の復讐のための闘いが始まった。はたして勝つのはどちらなのか？！

～闇の章～

「ここに重要なる魔界の儀式を執り行なう。
新たなる永遠の始まりの儀式を…、しかるべき時に、
ある言葉をもって、
世界は血の海に染まることに、なるであろう…。」

のび太とジャイアンはお互いに向き合い、にらみ合っていた。
これから始まる死闘の前兆なのか、周りの大気がビリビリと震えているようだ…。
そのときになって初めて、のび太はふと気がついたことがあった。
それは…、
「ジャイアン、スネオ、殺す前に貴様らに聞いておきたいことがある。貴様ら…一体どうやって巨大化した？」
「それはね」
と、スネオがまた自慢気に話し出した。
「僕はビックライトとカチンカチンライトを使って
プラモデルのガンダムを大きくして、鋼鉄化させたのさ。
そしてサイコントローラーで動かしているのさ。」
それを聞いてのび太は
「ふんっ、そんなことではないかとは思っていたがな。では、ジャイアンもそれで巨大化したのか。」
と、のび太が聞き返すとジャイアンは
「いや、ただ大きくなっただけではこの俺様のパワーが全く変化しないのだ。まあ、このままでももう十分なのだが、どうせならと思

ってな。そこでドラえもんから「Ｇｏ！　ｉｎ　ゲーム！」とかいう道具を借りて、マリオの世界の中に入ってきたのだ。そしてヒゲ野郎（リオ）からスーパーキノコを殺（ゆずりわたしていただいた）って奪ったのさ。
おかげ様で、今力が溢れそうでたまらないぜ。」
「そうか…、そいつを聞いて安心したぜ。」
「なにっ！？どういう意味だ？！」
まさかのび太がこんな余裕のある返事をするとはジャイアンも想像だにしていなかっただろう。
のび太はフッフッフッと、うすら笑いを浮かべながらこう言い放った。
「情けないままの貴様を殺しても自慢できないからな。それにこのほうが殺しがいがあるってもんだ。
さて、そろそろはじめようか…。オレの復讐の時間だ。長くにわたって続いてきたオレの苦しみへの復讐だ！」
ここまでのび太に気後れがちだったジャイアンはようやくもとのジャイアンに戻り、
「ばか者め、お前なんぞに俺が倒せるものか。お前の主人である俺にひれ伏すがいい！」
「ご免だ！」
ーー初めての体験だった。おそらく信じられないほど多量の脳内麻薬、エンドルフィンが私の脳内に
分泌されているのだろう。異様な集中力が私を襲っていた。それはまず視覚に表われた。見ようとすれば、
神経組織の細胞も毛細血管に流れる血球さえ見えてしまうのだ。私は間違いなく超人類となっていた…。ーー

ゴキッ。ボキリ。のび太はまるでジャイアンであるかのように指を鳴らしていた。
「貴様の命もここまでだ。」
「よかろう、やってみろ。」

そう言うやいなや、ジャイアンは素早く攻撃体勢に入った。
「見切れるか！？この蹴りを！」
ジャイアンはまるで北斗のケ〇のような素早い連続蹴りを放ってきた。が、
「ウオオオオオッ！！」
のび太はその蹴りを全て受け流していた。のび太の反射神経は予想以上に高まっていたのだ。
「うぬぅ、動きが読めん。だが、次は逃げ切れんぞ。」
今度はジャイアンは指先に全身のオーラ全てを集約させた。
「喰らいやがれ！剛田光殺砲！！」
のび太に向けて放たれた光線は螺旋状に回転しながら弾丸のように飛んでいった。
だが、のび太はその場から動かないまま、掌をジャイアンに向けて立っていた。そして、掌にオーラを集めた。
「ホアアアアアッ！」
そのまま剛田光殺砲を掌で受け止めたかと思ったら、それを握り潰して消滅させてしまった。
「ばかなっ！こ…こんなことが…あってたまるかっ！」
散々わめき散らした後、両手にオーラを溜めるとジャイアンは気孔弾を連続で打ちまくって来た。
「なまいきだぞっ！のび太ー！」
しかし、のび太はまたもや動こうとせず、片手だけで構え、
「所詮、弱者の悪あがきに過ぎないだろうに。」
と言いながら、全ての気孔弾を弾き飛ばしてみせた。
「まさか…、全部弾き飛ばした…。片手だけで…。」
もはやのび太の力はジャイアンを上回っていたのだ。
「今のオレにはお前など敵ではない。」
ジャイアンは後ずさりをしていた。
「なんと手強い相手だ！」
「次はオレの番かな。では技の基本を見せてやろう。」

そう言った途端、のび太は目の前から消えてしまった。
「え…、ど…どこだ？」
ジャイアンがその場から動けずに周りを見渡していると、
「ばかめっ！後ろだっ！」
「なにっ！？」
ジャイアンが振り返った瞬間、のび太の右ストレートがジャイアンの顔面に見事に入っていた。
「グワアアアッ！」
そのままジャイアンはその場で倒れてしまった。
「…終わりだ。」

のび太は倒れているジャイアンをちらっと見た後、横にいるスネオに視線を向けた。
「お前で最後だな、スネオ。」
「おいおい、相手を間違えないでくれないか？」
「うん？」
「ぬふふふはははっ！」
後ろを振り返ると、ジャイアンがなんともなかったかのように立ち上がっていた。
「キサマは永久にわしには勝てぬわ。」
「さすが、ジャイアン！」
「キサマの攻撃など、私には通用せんのだ。」
「無駄口を叩けるようでは…少し突きが浅かったかな…。」
だが、のび太はうすら笑いをしていた。
「何がおかしい。」
「貴様、忘れてはいないだろうな。貴様が巨大化できたのはスーパーキノコを食べたからだ。
つまり、一発でもダメージを受ければ…」
トゥッ♪トゥッ♪トゥッ♪
「し、しまった！」

「…小さくなるということだ。」
ジャイアンの体は元の大きさに戻ってしまった。これでもう勝ち目は無くなってしまった。
「どうしたの～、ジャイアン？」
あえて、のび太は昔のような感じで聞いてきた。
「ふぬううう～。」
ジャイアンは悔しがったが、もう自分では何もできないことはわかっていたので、
「スネオっ！」
「何だい？」
「反逆(のびた)者の相手はお前に任せる。生かして返すなっ！」
こうして、いよいよのび太とスネオが戦うことになるかと思いきや、スネオが突然、
「イヤだね。」
「な、何のつもりだ？私の命令を…」
「イヤだと言ったろう。急に耳が遠くなったのかな？」
「ふざけている場合では…」
「ふざけてなんかいないさ。アンタの声はもう聞きたくない。」
「き…貴様、う…裏切るのかっ！？」
「裏切る？いーや、違うね。見限るんだ。」
それにホラ、アンタ能力のある人間なんだろ。だったら自力で何とかしてみな…。」
ガラン。
「なんだか知らないが、こっちには都合がいい…。」
のび太はその辺に倒れていた電信柱を掴んでいた。そして、ゆっくりジャイアンに近づくと、
「では処刑する。」
「う…うおぉ…、うわぁああ…」ヒュッ、ドカンッ！！
「ぐわああっ！」
「貴様らに未来など必要無い！！」

ジャイアンの肉体はぐちゃぐちゃに潰された。もはや人としての原型をとどめないほどに…。
「おやおや…、本当に有能な部下だね。ご主人様を一撃だ…。」
「次は貴様だ。」
「おいおい、オレのセリフを盗るなよ。」
「その余裕もそこまでだ。」
「オレとやろうってのか？健気だねぇ…。」

こうして、ジャイアンを滅ぼしたのび太。続けてスネオとの戦いに挑む。だが、スネオの余裕は一体何なのか？
そして、勝負の行方は？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4445e/

超人類

2010年10月10日16時10分発行